

●グローバル化時代の医療・検査事情 24

世界の医学部を巡って (3)
I ヨーロッパ編 フランス

な ら のぶ お
奈 良 信 雄
Nobuo NARA

ドイツ、イギリスと回ってくれば、フランスを外すわけにはいくまい。

文科省の事業ではフランスの医学部を訪問する機会がなかったところ、2014年に厚労省からの依頼がとびこんできた。わが国の医師国家試験制度を改革するに当たり、諸外国の国家試験の状況について調査することになった。国家試験制度がないイギリス圏はさておき、アメリカ、カナダ、ドイツ、フランスを調査する企画を立てた。また、国家試験をコンピュータ試験(CBT)で実施している台湾、タブレットを使った試験をしている韓国も調査の対象に上がった。

フランスには新婚旅行と学会で行ったことがある程度。それ以外の情報はほとんどない。国土面積が約55万km²と日本よりも広いのに、人口は6,410万人そこそこ。アメリカ、イギリス、ドイツとは一線を画し、政治、経済、文化など、種々の面で独自のスタイルを貫いている。果たして医学教育はどうなっているのか、興味津々で訪問することにした。

I. フランス保健省訪問

フランスでは医学部を訪問する機会がなく、日本の厚労省に相当する保健省で医療制度、試験制度、医学教育のあり方などを聞き取り調査することになった。

ところが、保健省における先方との意見交換はすべてフランス語!! 出張に先立っての日程交渉は、すべて英語でのメールだった。しかし、出張の1か月前、いきなり「ところで通訳は付いて来るのだからね」ときた。英語で支障なくやりとりしてきたので、てっきり英語が通じるものとばかり思い込んでいた。

慌てて通訳を探す羽目になったが、わずか1か月以内に都合良く通訳が見つかるはずもない。しかも3月という忙しい年度末。伝手を頼ってあちこち交渉したものの、「あいにく先約が・・・」との返事ばかり。僕は大学教養部時代に第3外国語でフランス語を選択し、成績がAではあったが、とても保健省と胸を張って交渉できる自信はなかった。

焦りが募る中、東京医科歯科大学の教養部でフランス語教育を担当している教授に電話をしてみた。すると、知人がパリに住んでおり、在仏邦人のためのコミュニティ誌を編集しているとの情報を得られた。通訳が本業でないとはいえ、パリに15年以上も住んでいるとなれば、意思疎通に問題などあるまい。早速に通訳を頼み込み、快諾を得た。

フランス保健省はパリ市内の中心部にあり、エッフェル塔を臨む地区にある(写真1)。フランス保健省では、通訳の御蔭で、医学部入学制度、医学教育



写真1 フランス保健省玄関



写真2 フランス保健省での意見交換

制度、試験制度、医療制度などをしっかりと確認した。もっとも、僕自身は英語で日本の医学教育をプレゼンしたが、相手は難なく理解していた(らしい)(写真2)。英語を理解はできるが、取って自分からは他国語を話したくないというのが、大国フランス人の気位の高さか？

保健省訪問後は、パリ大学に寄った。パリ第4大学と第6大学が統合したソルボンヌ大学には、ルイ・パスツールやビクトル・ユゴーなどの像が威風堂々と鎮座しており、歴史の厚みを感じた(写真3、4)。近くにはローマ時代のテルマエ跡すらあった。

II. フランスの医療

フランスの国土は54.9km²で、わが国の約1.5倍ほど。27州の région から構成され、うち5州は海外にある。医学部は国内に37校あるほか、ギアナ、レユニオン島、ニューカレドニア、ポリネシアにも存在する¹⁾。人口はおよそ6,410万人で、2017年OECDの統計によると平均寿命は82.6歳と長寿である²⁾。現役の医師数は211,162人(329人/人口10万人)である。日本の人口10万人当たりの医師数は258.8人で、データだけを見ると、フランスの医療は充実しているようだが、医師の急速な高齢化が進んでおり、地域に十分な医師を配置することが喫緊の課題とされているとか。病院数は3,046で、健康保険には公的医療保険と任意の民間医療保険がある³⁾。

III. 医学部入学制度

入学は難しいが、その後は楽と言われるのが日本の大学教育。一方、ヨーロッパの大学は、入学は簡



写真3 ソルボンヌ大学
(左下はビクトル・ユゴー像)



写真4 ルイ・パスツール像

単だが、その後が大変とよく言われる。それをまさしく地で行っているのが、フランスの医学部だ。

フランスでは、医師養成を目指すコースに毎年約5万人が入学する。が、そのうちで医学部専門課程に進級できるのは7,500人そこそこ!! なんと入学者の15%ほどしか医学部専門課程に進めない仕組みだ。医学部に進めない者は、泣く泣く他の進路に進まざるを得ない。となれば、必然的に入学生の学修意欲は旺盛で、真剣に勉学に取り組んでいる。受験戦争を勝ち抜いて医学部に入学し、1年次はホッと一息つけるわが国とは大違いかもしれない。

各医学部での入学試験は行われておらず、中等教育修了・大学入学資格認定試験であるバカロレアに合格した者(20点満点の10点以上)が3校以内の医学部に出願し、入学が許可される。もっとも、医学部に入学するためには優秀であることが前提で、バカロレアの点数が秀(16~18点/20点)を獲得しておくことが有利とされる[優(14~16/20点)、良(12~14点/20点)]。

IV. 卒前・卒後教育制度

日本では、卒前・卒後のシームレスな医学教育の構築が課題になっている。現在、医学部教育は文科省の管轄、卒後教育は厚労省の管轄になっており、こうした縦割り制度を改変し、国民から真に信頼される医師の養成を段階的にステップアップしていく仕組みが熱望されている。そのモデルになるのが、フランスの医学教育であろう。

フランスの医学教育は第1課程（学士課程；第1～3学年）、第2課程（修士課程；第4～6学年）、第3課程（博士課程；専門科により第7～12学年）から構成され、まさしくシームレスである（図1）⁴⁾。医師養成教育は保健省と教育省が協同して所管し、EU共通のボローニアプロセスに則ってL・M・D [Licence (学士)、Master (修士)、Doctorat (博士)] に沿って教育されている。カリキュラムはすべての医学部に共通で、1年を半期ずつに分けた2セメスター制になっている。

①第1課程（第1～3学年）

第1学年は保健衛生学の教育課程で、医学、歯学、薬学、助産学の4分野が共通して基礎科学、社会人文科学を学ぶ。2012年現在、53,200人の学生が在籍している。

第1セメスターでは、基礎科学、器官・組織の機能が教育され、終了後の試験で、概ね15%は他の課程へ行くように進路指導される。第2セメスターでは、器官・組織の機能・形態、薬理学、人文・社会科学を学ぶ。第1学年修了後に進級選抜試験があり、成績によって医学部2年次にはわずか8,000名

(2012年度定員)しか進級できず、第1学年から第2学年への進級率は15～20%程度である。医学部に進めない学生は、薬学部に3,099人、助産学部に1,016人、歯学部に1,200人が進み(2012年)、それ以外の学生は法学部など他学部への転入を余儀なくされる。

第2学年次からは、基礎医学として生理学・解剖学・組織学等が教育され、4週間フルタイムの看護実習履修が義務づけられている。

第3学年では、症候学・医療画像・薬理学・細菌学等臨床医学が教育され、外国語、情報処理、法学等の教育もある。

第1課程の最終試験に合格すると、医科学一般教育修了免状(学士レベル)が与えられ、第2課程に進むことができる。

②第2課程（第4～6学年）

第2課程では、病院学生(エクスターンシップ研修)として、大学病院、地域大学病院センターなど、大学に付属する病院施設で研修が行われる。4～6年次にかけて、病院研修のほか、大学での臨床講義にも参加する。小児科、産婦人科、内科・老人科、一般医学はそれぞれ2～4か月の必修で、救急・蘇生・集中治療は1か月フルタイム必修になっている。精神科と病院試験室・研究室研修も推奨されている。病院学生には36回の当直もあり、第4学年生に1,500、第5学年生に3,000、第6学年生に3,350ユーロの年間病院手当が支給される。学生はさまざまな症候を学び、治療や処方箋発行はできないものの、基本医療手技の実施は可能になっている。

第2課程の修了時に医学教育第2課程修了免状(修士レベル)が授与される。

③全国順位付け試験 ECN (Épreuves Classantes Nationales)

6年次を修了して第3課程に進級した者7,492人(2013～2014年度)に対して5月に全国统一試験ECNが行われる。ECNは9つの臨床ファイル問題(MCQ形式)と、一つの批判的論文読解から構成され、全国判定機関によって同一基準で採点される。

ECNは、人口の高齢化、医師の高齢化、地域格差の是正などを目的に導入された。第2課程修了者の研修場所は州保健庁が決定しており、地域および専門分野ごとの研修医数が省令で決定されている。学生はECNの成績順に配属大学と専門科を選択で

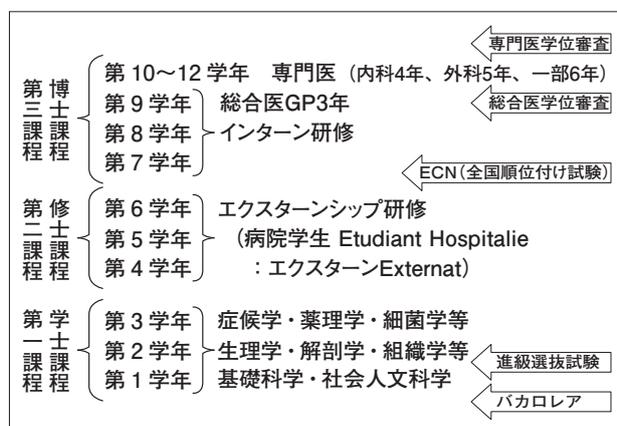


図1 フランスの医学教育システム

文献4)より引用

表1 専門医コース

◆ 麻酔救急蘇生科	◆ 内科系専門医：
◆ 医学生物学	- 解剖、組織、病理学
◆ 婦人科	- 循環器科
◆ 産科	- 皮膚性病科
◆ 総合医学	- 消化器科、肝臓病科
◆ 産業医学	- 遺伝診療科
◆ 小児科	- 血液内科
◆ 精神神経科	- 内科
◆ 公衆衛生学	- 核医学
◆ 外科系専門医：	- 再生医学
- 一般外科	- 腎臓内科
- 脳神経外科	- 神経内科
- 眼科	- 腫瘍科
- 耳鼻咽喉科	- 呼吸器科
- 頭頸外科	- 放射線診断科
- 口腔外科	- リウマチ科

きる仕組みになっており、医師（医学生）の地域偏在、診療科偏在の調整に役立っている。

つまり、優秀な成績を修めた学生は自身の志望通りの進路を歩めるが、成績が振るわない学生は自身の希望しない地域や診療科に進まざるを得ない。こうしてみると、進級から卒後の進路までもが競争の原理に立っており、学生の勉学意欲を否が応でもかき立てている。

④第3課程（第7～12学年）

第7年次からはECN成績順に応じて配属された病院で、総合医コースは3年、専門医コースは4～6年の研修を受ける。専門医コースには表1に示すような診療科がある。3年間の病院研修を修了し、研究報告と医学学位論文を提出すると総合医教育修了免状（DES Médecine Générale）を修得できる。4年間の病院研修を修了し、研究報告と医学学位論文を提出すると専門教育修了免状DES（Diplôme d'Études Spécialisées）を取得でき、さらにインターン研修後に助手を1年間勤めると補足的専門教育修了免状DESC（Diplôme d'Études Spécialisées Complémentaires）が授与される。

インターン研修最終評価で合格すると医師国家免許Diplôme d'État de Docteur en médecineを取得でき、医師会に登録して専門分野で医療に携わることが認められる。

V. フランス紀行

芸術の都、パリ。凱旋門（写真5）、ノートルダム寺院（写真6）、オルセー美術館などを見て回った。



写真5 凱旋門



写真6 ノートルダム寺院

ルーブル美術館では「ミロのヴィーナス」「モナ・リザ」「サモトラケのニケ」など、誰もが知っている美術品をごく間近で鑑賞できた。

筆者が医学部3年生のとき「モナ・リザ」が国立博物館にやって来た。今のパンダ人気ほどではないものの、大勢の人が集まった。休日は大混雑のため、講義の合間（あるいはサボったか？）に上野まで歩いて行った。平日にもかかわらず、ものすごい人だかり。1列だとらちがあかず、4列だか5列になってゾロゾロ歩かされた。「止まらないで下さい」の大声の中、通りすがりにチラッと眺めるしかなかった。あ那时的苦勞は一体何だったのか。ルーブルに來りゃ、じっくりと美人と対面できた。

ランチはビストロでとった（写真7）。ヨーロッパでは寒かろうが暑かろうが、外で食事をするのがトレンドのようで、真似をして外で食事を洒落込んだ。が、ただ黙々と食べる日本人には、まるで似つかわしくなかった。

さて、フランスには見所が多い。私用での訪問も含め、紀行を紹介したい。

まずは“美食の街”リヨン。ソーヌ川とローヌ川で挟まれた中之島のような中心部にベルクール広場があり、そこから小高いフルヴィエール丘の上にノートルダム・ド・フルヴィエール・バジリカ聖堂を望むことができる(写真8)。広場には、「星の王子さま」の著者であるサンテグジュペリの像もある。広場から聖堂へはケーブルカーで行くことができ、丘からは市内を一望できる。ヨーロッパの街は、上から見るとオモチャの街のように広がり、童話の世界に迷い込んだかのような錯覚を覚える。

丘から歩いて下る途中、ローマ時代の円形劇場跡があった。丘の麓には旧市街があり、異国情緒あふれる店もあり、摩訶不思議なアラビア料理を食べた。リヨンには、有名なポール・ボキューズのレストランがある。ほかにも、街のあちこちに郷土料理を専門とするブションがあり、さしずめリヨン版「おふくろの味」といったところだ。

さらにフランス料理を極めるべく、1時間ほど電車で揺られてブルカン・プレスに出かけた。日本のTV番組で、ここではフランス最高級の鶏が食せると紹介されていた。通常のエサではなく、蛋白質

の豊富な農場のミミズを食べて育てるからこそ肉質が良い、との解説だった。そこで、プレス鶏を専門に扱っている高級レストランに出向いた。が、英語がからっきし通じない。ウェイターと片言のフランス語でオーダーしていると、遠来の客を見かねたか、厨房からわざわざサンタクロースそっくりなシェフが出てきて、店自慢の料理を勧めてきた(写真9)。さすがに美味しく、赤ワインもついグビグビ。食後はサンタクロースに勧められるまま、レストラン向かいにあるブルー修道院を見学した。16世紀に建てられたフランボワイヤン・ゴシック建築とかで、他に類のない迫力ある建築だった。

リヨンからは高速鉄道TGVに乗りこみ、プロヴァンス地方のアヴィニオンに出向き、「橋の上で輪になって踊る♪」こととした。アヴィニオンの橋は、水量の多いローヌ川に架かっており、築いても築いても、洪水のたびに流されてしまう。このため、現在でも橋は中途半端なままで、対岸にはたどり着けない(写真10)。アヴィニオンは世界遺産にも登録され、城壁にグルリと囲まれている。小高い丘の上には14世紀に建てられた宮殿があり、ローヌ川に架かる橋の全容を眺めることができる。



写真7 パリ市内のレストラン



写真9 プレス鶏専門レストラン



写真8 リヨンの市内



写真10 アヴィニオンの橋

アヴィニオンからリヨンに戻る途中、「アルルの女」で有名なアルルにも立ち寄った。こちらも世界遺産に登録されている。アルルは紀元前1世紀、カエサルの時代にローマ帝国の植民地になった。このため、古代ローマ帝国時代の円形闘技場(写真11)が残り、そこでは古代の戦士よろしく、鎧をまとった男が剣で格闘するアトラクションを行っており、見物人からヤンヤの喝采を浴びていた。また、古代劇場もあり、その跡から発掘された「アルルのヴィーナス」などの遺跡が展示されている。レプリカだそうだが、「ミロのヴィーナス」と瓜二つだ。

フランスにいながら異国に迷い込んでしまったかの錯覚を誘うのがディジョンだ。ディジョンはパリからTGVで2時間弱のブルゴーニュ地方にある。かつてブルゴーニュ地方はブルゴーニュ公国として栄え、オランダ、ベルギーなどをも含み、フランスをも凌ぐ大国だったそうだ。14～15世紀にはディジョンが首都で、宮殿が往時の繁栄を彷彿させる(写真12)。宮殿の中央には塔があり、汗をかきつつエッチラ登ると中世の町並みを見下ろせ、モザイク模様三角屋根や木骨組みの家が楽しめる(写真13)。近くにあるノートルダム教会に寄ると、触れると幸

せになれるとかいう「幸福のフクロウ」が壁にあった。幸福になりたいと願うのは世の常らしく、皆がふれてフクロウはツルツルだった。

ディジョンでの名物はエスカルゴ、ブルゴーニュワイン、そしてマスタード。14世紀に権勢を誇ったフィリップ公は一晩で32リットルものマスタードを使って大宴会を催したとか。マスタード専門店に立ち寄ると、色とりどりのマスタードが並べられていた。いろんなマスタードを買って帰ったが、ローストビーフによくマッチした。

ところで、「スイスのようで、スイスでない」それはどこかと尋ねたら、アヌシーがお勧めだ。アヌシーはリヨンから2時間半ほど電車を乗り継いだフランスとスイスの国境にある小さな町だ。ヨーロッパで最も透明度が高いと言われるアヌシー湖を中心に、そこから流れるティウー運河沿いにかわいいレストランや店が建ち並ぶ(写真14)。運河沿いの小さなレストランで生ハムとドリアで昼食をとった。もちろん“高い”水の替わりに、“安い”白ワイン付き。それから歩いて湖へ向かった。湖からは、夏なのに白い雪を抱いたアルプスが遠くに聳える。

ティウー運河の真ん中には旧牢獄パレ・ド・リル



写真11 円形闘技場(アルル)



写真13 木組み枠の家(ディジョン)



写真12 ブルゴーニュ宮殿



写真14 アルプスを望むティウー運河



写真 15 旧牢獄パレ・ド・リル (アヌシー)

がある(写真 15)。窓らしい窓はなく、おそらく中は真っ暗だろう。ひとたび洪水になったら、人権などあったものではない。もっとも罪人になる方が悪いとの向きもあろう。なお、同じような牢獄を、イギリスの湖水地方でも見たことがある。どうやらヨーロッパは罪人に厳しいようだ。

ついでながら、新婚旅行は 40 年近く前。1 ドル 360 円の時代で、渡航費は高額きわまりない。それでも新婚旅行だからと奮発して、パリとスイスを 1 週間旅行した。初めての海外。期待と不安が交々のままツアーに参加した。パリの凱旋門近くのホテルに泊まり、リラの花が香る歩道を歩いた。ツアーのため、いわゆる観光地が主で、ルーブル博物館、ベルサイユ宮殿、ロワール地方のシャンボール城やシュノンソー城、エッフェル塔、そしてスイスではモンブランなどを訪れた。

ツアーは自分で計画しなくて済むだけに楽だが、その分記憶にしっかり残っていない。唯一自分で計画したのが、最終日のトゥールダルジャンでのディナーだ。何しろパリでも屈指の最高級レストラン。初めての経験で、緊張しっぱなしだった。予約して行くと、まずはゆったりした待合室へと通された。どうして良いものかまごついていると、隣に座っていた紳士が、シャンパングラスをあげて「なに、ゆっくりシャンパンを飲んでいるとよいのだよ」と、教えてくれた。お勧めに従ってグラスを手にとった。

シャンパンで酔いがまわるうちに、緊張感はどこかへすっ飛び、気持ちにもゆとりが出た。これこそが良い意味でも悪い意味でもアルコールの効能だ。やがてテーブルに通され、恰幅の良いフランス紳士風のコンシェルジュがメニューを持って現れた。フランス料理ではエスカルゴが有名だと信じ込んで

いたので、メニューにある「escargot (フランス語)」を、と注文した。ところが、奴さん、首を三度横に振り、「non, non」ときた。懸命に彼のフランス語での説明に耳を傾けると、「エスカルゴなんか一流レストランで食べるものじゃない。ここでは鴨がお勧めだ」と。

そういえば、この鴨は創業以来ナンバーをつけており、昭和天皇も何番かの鴨を食べたとガイドブックに載っていた。ヤムを得ず(?) 鴨を注文すると、我が意を得たりとばかりと、奴さんはしずしずと鴨を盆に載せて見せにきた。これで宜しゅうございますかと。断る理由など見つからず、「C'est très bien. (結構です)」と応じた。

美味しい鴨とワインで満足至極。確かにお勧めの鴨はとびっきり美味しく、ワインもマッチしていた。ほろ酔い気分で勘定を見た途端、折角の酔いは一瞬にして消え失せた。請求書のフランを円に換算して、血の気を失ったのだ。クレジットカードなどない当時。現金がすべて。ポケット中のポケットを探り、ありったけのフランをかき集めた。どうにか、間に合った!!

ちなみに美食家の北大路魯山人がトゥールダルジャンよりうまい鴨料理店が琵琶湖に面する長浜にあると紹介していた。それを見た妻が、電話で予約をいれた。NHK 大河ドラマで山内一豊の妻千代を描いた「功名が辻」が放映されていたときで、山内家ゆかりの長浜へ向かった。古い料亭の 2 階和室で鴨をいただいた。この鴨はトゥールダルジャンとはまるで異なり、鴨鍋だった。ジャンルが違うので、どちらに軍配をあげてよいものか、魯山人ならぬ凡人の舌では判断できなかった。

文 献

- 1) Inter Syndicat National des Chefs de Clinique Assistans des Hôpitaux de Ville de Faculté (ISNCCA)
URL: <http://www.isncca.org/FaculteMedecine.php>
最終アクセス 2020.09.06
- 2) OECD Data URL: <https://data.oecd.org/france.htm>
最終アクセス 2020.09.06
- 3) ブルーノ・パリエ(近藤純五郎監修/林昌宏訳)医療制度改革—先進国の実情とその課題. 文庫クセジュ. 白水. 東京. 2010. p1-p150.
- 4) 鈴木利哉, 奈良信雄: 卒前教育・卒後臨床研修のシームレスな連携と診療科・地域の医師偏在解消を目指すフランスの医学教育. 医学教育. 2014; 45: 201-206.